六義者、古今注云、「天竺礼文、唐詩賦、日本和謌、三国和来。依て大和歌」云云。是皆、六義を具足せり。風・賦・比・興・雅・頌也。此意移取て、遊楽之芸風之習道とせんとなり。然者、当道之曲体に九位之見風是あり。其条条、六義に寄て、是を顕なり。

一、風曲

妙花風九位第一是也。風者、古今注云、「色体見えざれども、物にそゑて風と云るる也」と云云。妙者、天台妙釈云、「言語道断、不思儀、心行所滅之処」云云。故体なし。只曲風にそゑて是あり。又、尋ぬれば無所得也。然者、妙花風を以て、風曲とすべき歟。

二、賦曲

寵深花風同第二是也。賦者、古今注云、「一首に心多き歌也」と云。寵深花風と者、美しき姿也。「深」者、離見之見、「花」者、顕風也。如此、意景多。然者、寵深花風を以て、賦曲とや云べき。

三、比曲

閑花風第三是也。比者、古今注云、「物を二並べて、何も同様なり」と云云。閑花者、「閑」は柔和なる感心、「花」は秀でたる色心なり。「閑」「花」、いづれも妙果の甲乙なし。然者、閑花風を以て、比曲とや申べき。

四、興曲

正花風第四是なり。興者、古今注云、「物を二置きて、勝負を分也」。正花者、花の正しき見風は、当道にては得花なるべし。是即、得手也。得手あらば、又おろそかなる方あるべしと見えたり。さるほどに、芸道に勝負の証見あるか。然者、正花風を以て、興曲とや云べき。

五、雅曲

横精風第五是なり。雅者、古今に「事の整をり、正しきを云なり」と云云。横精と者、広くして精かなるは、事の整をり、正しきにあらずや。是、安全の姿なり。然者、横精風を以て、雅曲とや言はむ。

六、頌曲

強細風第七是なり。頌者、祝意也。又、強細者、「強き」は負けぬ心、「細き」は和らぐ儀也。強くして和らかならんは、即心のままなるべし。是、如意曲也。心のごとくの曲ならば、慶風なるべし。是、祝言にあらずや。然者、強細風を以て、頌曲とや申べき。

但、強きに心得べき事あり。仁・義・礼・智・信に、義を「和なり」と注せり。義は強き心かなるを、「和らぐ」と也。然者、和らぎて負けぬや、強きならん。毛詩云、「治れる代の声は、安して以て楽しむ」と云云。治まるは、強き儀也。返返、和らぐは強き道かと見えたり。

本文如此。

右、如此条条、当道為習智之所及誌也。

凡、六義の心を当芸に移して、分明に其一風一風の所得に安住して、性位之達人に至ば、六義を一曲に得、上士と可成。然者、和謌之上聖にも、六義を一首に詠める秘歌あり、と云云。

応永卅五秊三月九日

此一巻、金春大夫所望依為相伝所也

世阿　花押